

巻 頭 言

『教育心理学年報』のあり方をめぐって

『教育心理学年報』第44集編集委員長 小 石 寛 文 (神戸大学)

『教育心理学年報』第44集の編集にあたり、『教育心理学年報』のあり方がいろいろと議論されました。

まず、「教育心理学本邦文献目録」については、これまで上杉喬先生の個人的なご尽力によって支えられてきたものでした。しかしこのような個人的なご協力を得続けることによる上杉先生のご負担のことを考慮しなければなりません。その一方で、会員に著書、論文等の情報提供を求めても、集まり具合が芳しくないということです。そして、最近インターネット検索による情報収集が一般的になり、せっかく苦勞してつくっていただいても利用する会員が少なくなっているのではないかと思います。このような状況から、上杉先生に事情をご説明しご了解を得て、これまでのご苦勞に感謝しつつ、第44集からは「教育心理学本邦文献目録」をとりやめることにしました。

『教育心理学年報』の今後のあり方についても活発な議論がなされました。年報はこれまで我が国の教育心理学研究の現状を記録するという意味合いが強かったのですが、たとえば「教育心理学評論」というような内容で、展望論文を中心にした雑誌にしてはどうかという考えです。その場合、展望論文の投稿がどの程度望めるか、査読体制をどうするかということも併せて検討しなければなりません。また、現職教員の会員が増えている状況から、研究畑以外の会員向けの教育的な内容の論文を載せるという考えも出されました。さらには、学会でのシンポジウムの中から『教育心理学研究』の実践研究にはなりにくいけれども意味あると思われるものを推薦してもらって掲載してはどうかという意見や、名誉教授、名誉会員クラスの方々に歴史的背景も含めた随筆風のものを書いていただいて掲載してはどうかなど、自由で活発な論議がなされました。

そのような議論の中でも、やはり教育心理学研究の歩みを記録するというこれまでの役割は無視できないという根強い意見もあります。そして、各地方の活動状況や学校心理士会の活動状況も盛り込んではどうかという意見もありました。

これらの議論は緒についたばかりであり、第44集には間に合いませんでしたので、今回の編集には反映されていません。しかし、このような議論は来年度以降の編集委員会や理事会においても、多くの会員の意見を反映させながら真剣に検討をしてほしいと思っております。時代に合った多くの会員が読みたいと思う情報をどう盛り込んでいくか、あるいは作り替えていくかということはこれからも絶えず検討していかなければならない課題であると思います。このような議論が多くの会員の関心となり、よりよいものになっていくことを編集委員会としては期待しています。

最後になりましたが、長年「教育心理学本邦文献目録」にご尽力いただきました上杉喬先生に心からお礼を申し上げます。